

## 書籍紹介

中田雅博 著

## 『緒方洪庵——幕末の医と教え——』

平成22年(2010)に緒方洪庵生誕200年を迎えるに際して、時を得た良書が出版された。著者中田雅博氏は産経新聞記者として平成19年(2007)から2年間に、「適塾再考」と題する特集記事を産経新聞に72回にわたり連載された。これまで緒方洪庵、適塾については研究報告、紹介文献が多数刊行されているが、著者は最近に至るまでのそれらの関係資料を丹念に探索、調査された上で、適塾研究の第一人者である大阪大学梅溪昇名誉教授に密着取材されてその見解を確かめて発表された貴重な報告であった。

今回さらにその全貌をこの書に過不足なく要領よくまとめられて刊行されるに至ったものである。これから適塾のことを知ろうとする者はまずこの書を繙かねばならないであろうが、適塾のことは周知と思われる者にとっても改めて目が開かれる叙述が多い。

その内容は次に示す章立てから窺うことができる。

## I 洪庵の修業時代

- 1 医師になりたい
- 2 天文・物理学を学ぶ
- 3 医学・薬学を学ぶ

## II 適塾と緒方メース

- 1 幕末という時代に
- 2 塾生の生活
- 3 教育者・洪庵
- 4 塾生の母・八重

## III 蘭学医として

- 1 洪庵はどんな医師か
- 2 西洋医学書を翻訳する
- 3 医療倫理を示す
- 4 天然痘との戦い
- 5 コレラとの戦い
- 6 洪庵、江戸へ行く

## IV 適塾の群像

大村益次郎 武田斐三郎 渡辺卯三郎  
佐野常民 杉 亨二 大島高任 橋本左内  
大鳥圭介 長与専齋 福沢諭吉 野村文夫  
高松凌雲

著者の史料の取り扱い、解釈には決して既書にとらわれず、バランスのとれた著者自身の見解に基づいて全編が叙述されている。たとえば、洪庵が父の許しを得ずに中天游の蘭学塾へ入って医の道を選んだ時の事情、洪庵が中天游から『曆象新書』の講義を通じて得た理を押しつけて論じる科学の真髄を得た事実など従来は余り取り上げられなかった観点から著者のこの書におけるスタイルがうかがえる。また種痘についても、洪庵が牛痘の前に人痘を使った経緯と心の内の考察、除痘館開設に当たり町奉行との接触に見る洪庵の社会性、コレラ流行における生々しい描写など随所に著者の記者出身の感覚ならではの独自の眼を見る思いがする。

洪庵の畢生の著作の『扶氏経験遺訓』『病学通論』『虎狼痢治準』についてはその出版背景や事情が懇切に解説されているのは、洪庵生誕200年記念に出版が予定されている『緒方洪庵全集』の参考資料としても貴重な情報である。またたとえば「扶氏医戒之略」についてもその内容の幅広さに加えて、医の倫理の源泉のヒポクラテスの誓いにまで遡り解説するという用意周到さである。万事このように随所に教えられるところが多い。

巻末にはこれまでに発表された文献、研究資料を遺漏なく「文献一覧」としてまとめられ、さらに付属資料として「緒方洪庵年譜」「緒方洪庵の著書・翻訳書等一覧」「扶氏医戒之略」英訳「適塾門下生一覧」を付されているのも懇切である。「適塾門下生一覧」は『姓名録』に記名されている全塾生について、これまで適塾関係者が調査、

発表した結果の要点を簡潔にまとめて表としたものである。

(芝 哲夫)

[思文閣出版、〒606-8203 京都市左京区田中関田町 2-7, TEL. 075 (751) 1781, 2009年9月, A5判, 400頁, 2,500円+税]

## 石井拓男・渋谷 鉦・西巻明彦 著 『スタンダード歯科医学史』

私は「歯科医学史」については門外漢であるので、本書を十分に紹介できるかどうか心もとない思いであるが、30年以上に亘って門前の小僧として歯科大学に勤め、医療倫理の歴史を研究の対象にしてきた。そのため、歯科医学の歴史には関心があったので、本書の紹介を引き受けた次第である。

本書は、日本歯科医学学会会員の著名な3教授が各々専門の立場から、歯科学生を対象にして著した啓蒙的な入門書である。世界と日本の歯科医学の歴史が平易な言葉で説明されており、初心者や歯科学生にとっては歯科医学の全容の歴史を知る上で有益な書籍である。

まず、本書を全体的に眺めると、写真が豊富で、重要な語句の解説も適時に施されており、特に歯科学生にとっては興味深い構成と思われる。平成22年度より歯科医師の国家試験の「必修の基本的事項」の中で「医学史、歯科医学史」が出題範囲として取り入れられている。今後、先人の叡智を知ることの有用性から共用試験(CBT)にも出題される可能性が考えられる。また、歯科学生が「歯科医学史」を知るとは、歯科医学の本質や目的を学ぶことになり、本書はその手がかりを提供してくれる重要な入門書であると思う。

歯科医学の歴史は古いが、体系的な「歯科医学史」の書籍が登場するのは昭和6年7月に発行された川上為次郎著の『歯科医学史』ぐらいである。現在、その歯科医学史は科学書院から影印本として復刻されているが、古い言葉や漢字が使われており、若い初心者の歯科学生が興味を抱くような歴史書ではない。他にも若干の先行の歯科医学に関する歴史書が出版されているが、体系的学術的

に構成されていない。それに対して、本書は歯科医学を勉強する読者にとっては、先人の豊かな叡智や歯科医学の全体的な流れを容易に知ることができる書籍である。しかし、本書の性格から専門家が研究資料として利用するには情報量が少ない。

本書の『スタンダード歯科医学史』は写真による資料が豊富で、構成も歯科学生が関心を持つような心遣いが随所に見られる。最初に、本書は日本と世界を対比した「歯科医療の歴史略年表」が11ページに亘って示され、その下部にはカラーによる関係資料が多数配置されているのも特色である。そのため、初心者や歯科学生は、まず視覚と合せて「年表」から歯科医学の情報を得て、概略史を知ることができるので、内容が理解しやすい構成になっている。

本文は2色刷りで、左側には関係する簡単な解説と多くの写真が配置されており、文章も簡潔である。内容として、各章を目次から示すと、1 古代の歯科医学史、2 中世の歯科医学史、3 ルネサンスの歯科医学史、4 ルネサンスから近代の歯科医学史、5 フォージャーとアメリカの歯科、6 解剖学の歴史、7 外科学の発達、8 麻酔法と消毒法の発見、9 歯科医学に貢献した発見・発明、10 江戸時代までの日本の医療制度、11 日本の医学の発達と蘭学の受容、12 江戸時代の歯科医療文化、13 日本固有の義歯と口腔ケア、14 西洋近代歯科医学の導入、15 歯科医師法成立から厚生省発足まで、16 戦後の歯科衛生士法誕生と歯科大新設ラッシュ、17 戦後の歯科医学教育にかかわる制度の変遷、18 公衆歯科衛生のあゆみ、となっている。これらの章の最後には、「まとめ」が簡